

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

今年の夏、ひよんな事から知り合った高校生・橘たちばなアサトに片想い中。

謎の少女・ツバキと出会い、彼女を救うために〈機獣少女きじゅう〉となったやみひめは、『スライム』のような敵と戦う。しかし、生き物を殺すこと——命を奪う行為に抵抗を感じ、戦闘中に戦意を失ってしまう。だが、MBデバイス〈カグツチ〉の機転で危機を脱し、ツバキと共に生き延びる事に成功する。

逃走した『スライム』を追うと言うツバキに対し、やみひめは彼女を手伝うため、〈機獣少女〉を続ける事を申し出る。

たった一人で戦う少女を放っておけなかったから。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

「私——〈機獣少女〉、続けるよ」

〈機獣少女〉になって『スライム』と戦い、〈カグツチ〉に助けられ、なんとか窮地を脱したやみひめは、ツバキにそう言った。もう自分とは関係ないと、放っておけなかったから。やみひめの言葉に、背中を向けていたツバキが振り返る。その表情には驚きと、ほんの少しだけ喜びが混じっている。

ツバキも判っているのだろう。誰かの助けが必要だという事が。

だが、ツバキはそれを言えない。プライドや体裁でなく、やみひめを危険に巻き込みたくないと思っっているから。

だが、そんな優しいツバキだからこそ、やみひめは手伝ってあげたいと思った。

「私、役に立てないかもしれないけど、また〈カグツチ〉に助けてもらわないといけないかもしれないけど、それでもいいなら——ツバキを手伝わせて」

「……あれを倒すのは〈機獣少女〉の仕事です。やみひめさんは一般人で、それ以前に、この戦いに何の関わりもありません。それなのに、どうして——？」

ツバキの蒼玉サファイアのような青い瞳がやみひめを見つめる。彼女の真意を見極めようとするように。

「だって、ここは私の住んでる場所だもん。放っておいたら、今度は別の誰かが襲われるかもしれないし、また私が狙われるかもしれない。関係なくなるとはいえ。それに——」

それに——

「私がツバキを手伝いたいから。それじゃあ理由にならないかな？」

「どうしてですか？ 見ず知らずの、今日会ったばかりの他人の私を……」

ツバキの表情が揺れている。それは戸惑っているようにも、不安がっているようにも見える。

「そうだね、ツバキの事なんて何も知らない。だけど、知りたいって思った。だから、手伝いたいんだと思う」

ツバキには判らないのだろう。やみひめが、なぜ自分を気にかけるのか。判らないというのは不安につながる。それは怖い事だから。

「でも、それも口実で、本当はもっと簡単な理由」

ならば、やみひめはストレートにこう言うしかない。

「私ね——ツバキと友達になりたいんだ」

第三話

『機獣少女の戦う理由』

温かいお湯に浸かるのは気持ち良い。風呂は命の洗濯って言うけど、大変な目に遭った後だと、余計にそんな風を感じる。普段なら何も考えずに、ぼーっとリラックスするところだけど、今夜はそういう訳にはいかない。

「すごい、お湯に浮いている……」

私は目の前の柔らかそうな二つの膨らみをまじまじと見つめ、そんな事を口走っていた。

「……そんなに見ないでください」

私の無遠慮な視線から逃れるように、膨らみの持ち主は両腕で自分の身体を抱くようにして胸を隠した。けど、細い腕で隠しきれるような代物じゃない。彼女の恥ずかしそうな表情も手伝って、その姿は余計にえっちな。

「私、もう出ますから」

「ごめんごめん。もう見ないから」

少し不機嫌そうな声になった彼女に、私は謝った。けど、どうしても見てしまう——彼女の大きな胸を。

「まったく……。まさかとは思いますが、そういう趣味の方じゃありませんよね——やみ

ひめさん？」

彼女が私にジトツとした視線を送ってくる。どういう意味だろう？

「そういう趣味って？」

「世の中には、同性が好きだったり、男女問わず恋愛対象だったりする方がいるんです」

前者を『百合』後者を『バイ』と言うらしい。

「そうなんだ。あ——私は普通だよ。好きな人はいるけど男の子だし。でも、ツバキは可愛いと思うよ？」

そう言うと、彼女——ツバキは少しだけ顔を赤くした。

公園での一件——ツバキと出会って、〈機獣少女〉になって戦って、ツバキを手伝いたいと言った。答えは保留になったけど、休み場所がないならと、今夜は私の家に来てもらった。一緒にご飯を食べて、今は一緒にお風呂タイム。ツバキは恥ずかしがっていたけど、お客さんと風呂に入るのが日本の作法だと言ったら信じてしまった。結果、今こうしてツバキと裸の付き合い中。

ツバキは小学五年生で、私より一つ歳下らしいけど、身長は同じくらい。だから、余計に胸が大きいのが目立つというか、つい見てしまう。着痩せするから判らなかつたけど、裸だと隠しようがない。

「……やっぱり、もう出ます」

「駄目だよ。肩まで浸かって、百数えないと。これ、日本のお風呂のルールだから」

胸に視線を送っていたのがバレ、ツバキがお風呂から出ようとす。私は引き止めるため、咄嗟とっさにそんな言葉を思い出した。小さい頃はお風呂が嫌いで、すぐに出ようとすると言われるお決まりの文句。だけどツバキは知らないから、信じてしまった。

ルールは守らなきゃいけない。ツバキは真面目な子なんだと思う。

「——やみひめさん、好きな人がいるんですね」

真面目なツバキが、急に俗ぞくっぽい話題を口にした。けど、真面目っていうのは私の勝手なイメージで、普通の女の子なら、普通に興味のある話題。だから、私は素直に「うん」と答えた。

「どんな方なんですか？」

「うーん……ダメ人間？ いつも面倒くさそうな顔してて、やる気がなくて、でも放っておけない感じかな」

「……やみひめさん、もしかして駄目好きですか？」

「ち、違うよ！ アサトはダメ人間だけど、駄目なだけじゃなくて……優しいところもあるんだよ？」

私の反応に、ツバキがまたジトツとした目つきになった。

「今の、典型的な駄目好き女子の台詞せりふですよ？」

「そうかもしれないけど……だって、本当だし——」

考えてみれば、アサトの良いところなんて浮かばない。

「……本当はね、自分でもよく判らないんだ。なんで好きなのか」

私を『やみ子』なんて呼ぶし、意地悪な事ばかり言うし。

だけど、私を助けてくれたし、夏祭りにも一緒に行ってくれて、浴衣ゆかた似合ってるって言うてくれた。

「けど、すごく気になるの。急に思い出して、今、何をしてるか考えたりしちゃうの。放課後が近付くと、早く逢あいたくてそわそわするの」

どうしてかは判らない。

けど——

「これって、好きってことじゃない？」

理由にはなっていない。

だけど、判らないものは仕方ない。

それに、人を好きになるのは理屈じゃないっていうし、私が好きなんだから、理由なんてどうでもいい。

「恋は盲目——そんな感じですね」

反論する私に、ツバキは苦笑気味にそんな言葉を使った。恋は常識や理性を失わせる――確か、そんな意味だったと思う。普通に考えたら、『冷静になれ』って言われてるんだろうけど、ツバキの表情は呆れてるだけじゃない気がする。

「ツバキはそういう人いないの？」

だから、軽い雑談のつもりで訊いてみた。友達のうちには、私の相談には乗ってくれけど、自分の事ははぐらかして教えてくれない。気になる。

「残念ですが、やみひめさんが期待しているような話はありませんよ」

ツバキの答えは、はぐらかすでも、秘密でもなかった。嘘を言っているようには見えないし、ツバキは落ち着いてるから、同年代の男の子には興味がないのかもしれない。私の場合、アサトはちよつと歳上だけど。

『――浮いた話はないが、ツバキのファンなら大勢おるぞ？』

不意に、スピーカーを通したような機械音声マシン・ヴォイスが響いた。それは時代がかった古風な口調で、女の人のものだ。

「そうなの、〈カグツチ〉？」

機械音声マシン・ヴォイスを放った黒い勾玉まがたま――待機状態のMBデバイス〈カグツチ〉に問い掛ける。緊急事態に備え、ツバキが持ち込んだんだけど、防水とかがしてあるのかな？

『うむ。これだけ見目麗しい容姿に加え、年齢に似合わぬ落ち着きと豊富な乳房ちぶせのギャップが、多くの男共を魅了しておるのだ』

「へえ、そうなんだ」

確かにツバキは可愛い。青い瞳は蒼玉サファイアみたいに綺麗だし、サイドポニーほじを解いたセミロングの黒髪はサラサラのストレート。大人びた口調や雰囲気は、似合っていて素敵だと思っ。

それにしても、ツバキの世界でも、男の人は胸が大きいのが好きみたい。そうか、ギャップか……。

「……〈カグツチ〉、余計な事は言わなくていいです」

『そう言うな。私も其方達のガールズトークそなたに混ぜるがよい』

迷惑そうなツバキに、〈カグツチ〉は楽しげな口調で答えた。どうでもいいけど、この口調で『ガールズトーク』って言われると違和感がある。

『ツバキは名うての機獣少女なだから知名度も高い。時々ではあるが、メディアのインタビューきじゅうなども受けるしな』

〈カグツチ〉の補足を聞いて、ファンが大勢いるという理由が判った。機獣少女は人知れず戦う謎のヒーローとかじゃないみたい。

「すごい！ アイドルみたいだね」

「民心を不安にさせないのも、〈機獣少女〉の仕事の一環ですから」

私の反応にツバキはそう答えて、照れたような困ったような顔をした。

『人々の心の拠り所となる。偶像とは本来そういうものだ』

アイドル

〈カグツチ〉の言葉を聞くと、日本のアイドルとは少し意味合いが違うのが判る。〈機獣少女〉は戦うんだから、フランスのジャンヌ・ダルクみたいな存在なのかもしれない。戦場に立って敵と戦い、人々の平和な暮らしを守る——みたいな。

「——ねえ、〈機獣少女〉ってどういうものなの？」

今更のように、そんな疑問が浮かんだ。訊けるような状況じゃなかったから、考えないようにしてたけど、知りたい事はたくさんある。

「そうですね——きちんと説明すると長くなるので、お風呂を出てからにしましょうか」
ツバキの言葉に賛同して、一緒に浸かっていたバスタブから出る。お湯を出る時にちらりと見たけど、やっぱりツバキの胸は大きい。

自分の胸元を見下ろす——うん、比べるのはやめよう。



ドライヤーで髪を乾かし、お互いにパジャマに着替える。ツバキには私のパジャマを貸したけど……胸元が窮屈そうだったので、上だけお母さんのを貸してあげた。その時のツバキの恥ずかしそうな顔が可愛かったんだけど、指摘したら「機嫌斜めになってしまったって、許してもらうのに時間がかかった。本当に気にしてるみたいだし、もう触れるのはやめた方がいいのかな。」

それから一緒に私の部屋に行ったんだけど、そこでクッションが一つしかない事に気付いてリビングに取りに行って戻ってきたら、ツバキが棚に並んでいる本やDVDを興味深そうに眺めていた。

「面白そうなのがあれば見ていいよ」

「あ、おかえりなさい。たくさんありますね」

「DVDは親戚のおじさんにもらったんだけどね。ブルーレイ版を買ったら、要らないからって、私にくれるんだ」

『どーぞどーぞどー……このプラケースですか？』

DVDのケースの背表紙を指差して、ツバキが不思議そうな口調で言った。

「うん。DVDっていう映像ディスクなんだけど、ツバキの世界にはないの？」

適当なタイトルのDVDケースを棚から取り出して、開いて見せる。そこにはブックレットと共にディスクが一枚収納されている。

「……このディスクに映像が記録されているんですか？」

「うん」

ツバキの反応は大昔から現代にタイムスリップしてきた人みたいだ。信じられないといった顔でDVDの盤面を見ている。

「先ほど言っていた『ぶるーれい』というの？」

「うん。DVDの次世代メディアで、映像がもっと綺麗なんだよ。私はAVマニアじゃないから、あんまり違いは判らないんだけどね」

「これが一般家庭にも普及しているんですか？」

「そうだよ。ブルーレイが普及してから、DVDはすごく安くなったんだって」

それから、内容にも興味を持ったツバキと一緒に観賞会をした。観たのは特撮もので、携帯電話をベルトに装着して変身するヒーローが、人類の進化系と呼ばれる怪人と戦う名作TVシリーズ。主人公が変身するヒーローのデザインが『科学の結晶』って感じで格好良くて、私もお気に入りの作品。

「なるほど。この国の娯楽文化は進んでいるんですね。これだけの水準のものが、毎週テレビで放送されているというのは信じがたい事です」

ツバキは内容よりも、映像や造形技術の方に感心したみたい。けど、それだけじゃなくて、

「内容も興味深かったです。子供をメインターゲットにしつつも、けて子供騙しではないストーリーと演出だと感じました」

と、気に入ってくれたみたいで嬉しい。女の子でこういうのが好きな子は珍しいし、あまり人には教えないから、余計にそう思う。

「続きも気になるところですが、夜も更けてきました。お疲れでなければ、そろそろ本題に移ろうと思いますが——どうしますか？」

「私は大丈夫。ツバキこそ、疲れてない？」

「はい。問題ありません——」

『駄目だ。今日はもう休むがよい』

ツバキの言葉を遮って、〈カグツチ〉の機械音声マシン・ヴォイスが割り込んだ。

「急にどうしたの、〈カグツチ〉？」

『ツバキはもう二日ほど寝ておらんだ』

不思議に思っきて訊くと、〈カグツチ〉からそんな答えが返ってきた。

「そうなの、ツバキ!？」

「こちらに来てから、休む場所も余裕もなかったの。でも、大丈夫ですよ」

そう言ってツバキは微笑を浮かべた。知らなければ信じたかもしれないけど、知ってしまつたら、もう無理をしようにしか思えなかった。

「ううん。今日はもう寝よう。実は私、すごく眠たかったんだ」

だから、私はそう言って欠伸あくびをして見せた。ツバキには演技だつてバレてると思う。だけれどツバキは、申し訳なさそうな顔をして、信じたふりをしてくれた。

明日は土曜日で学校はないから、話は明日すればいい。

生きてるんだから明日がある。

「……もしかしたら、『明日』なんてなかったかもしれないよね」

ツバキと一緒にベッドに入つて、灯りあかを消してから、ふと思った。声に出してしまったのは、そうならなかったんだって確認するため。

「はい。でも、明日はあります。やみひめさんが戦ってくれたおかげです」

「その前に、ツバキが護ってくれたよね。ありがとう」

「その後、やみひめさんに助けられました。ありがとうございます」

「じゃあ、おあいこだね」

そう言って笑い合つてから、すぐに私達は眠りに落ちた。疲れてるのも眠いのも、気付いてなかっただけだったんだ。



翌日、私達が起きたのは昼過ぎになつてからだった。二日も寝てなかったツバキはもちろん、私も信じられない体験をしたせい、疲労が大きかったみたい。休日とツバキが泊りに来てるからという理由で、お母さんは大目に見てくれた。

それから、お母さんの用意してくれた昼食をツバキと一緒に食べて、私の部屋に戻った。

「お母さんもお父さんも、ツバキの事を本当に親戚の子だつて思ってるんだね」

そう、お母さん達にはツバキが親戚の子で、泊りがけで遊びに来てる事になつてる。ツバキを家に泊める上で、どう説明するかが問題だったけど、それはツバキ——というか、

〈カグツチ〉が解決してくれた。

『ちよつとした暗示の一種だが、普通の人間であれば簡単には解けぬよ』

私が感心していると、〈カグツチ〉が時代がかった機械音声マシン・ヴォイスで言った。

「それって、後遺症みたいなのとかはないんだよね？」

「大丈夫です。ご両親の認識力を〈カグツチ〉の能力で一時的に低下させ、そう信じ込ませただけですから。とはいえ、嘘を吐いている事には変わりはありませんが……」

私の不安に答え、ツバキが申し訳なきように表情を曇らせた。やっぱり、真面目な子なんだ。

「仕方ないよ。本当の事は言えないし、信じてもらえないと思うから」

「……………」

「それに、口裏を合わせてる私も同罪だよ。だから、一人で抱え込まないで。後で一緒に家の手伝いとかしようよ。それでチャラ。ね？」

少しでもツバキの罪悪感が減らせればと、そんな提案を試みる。

『犯した罪は消せない。しかし、贖罪は可能だ。もっとも、相手が許してくれるかは別の話だな』

〈カグツチ〉の言葉は少し重い、というか実感がこもってる。やっぱり、ただの人工知能とかじゃないんだろうな。そんな事を思いながら、ちらとツバキの表情を窺う。

「……そうですね。すみません、気を遣わせてしまいました」

「ううん、気にしないで」

良かった、ツバキの表情が明るくなって。家にいる間だけでも、心配事はなくしてあげたいから。

「では、昨日の話を続きをしましょう。(機獣少女)の事でしたね」

ツバキが気を取り直すように話題を転換してくれる。もう大丈夫かな。

「しかし、どこからお話しすべきでしょうか……」

『ここは地球だ。まずはゼヘナの事からであろうな』

〈カグツチ〉の答えに頷くと、ツバキは真剣な表情で私の目を見つめて言った。

「やみひめさん、信じられないかもしれませんが……私はゼヘナという別の星から来ました」

「うん。二人の会話を聞いてて、この世界の人間じゃないってというのは感じてた。別の星っていう事は、ファンタジーみたいな異世界とかじゃないの？」

「……正直、驚きました。信じてくれるんですね」

「だって私、魔法少女みたいに変身したんだよ？ 昨日見たDVDじゃないけど、変身なんて技術は地球にはないもん」

変身ヒーローや魔法少女は、特撮やアニメにしか存在しない。昨日の体験があれば、ツバキの話を感じるしかない。

『なるほどな。だが、そう簡単に受け入れられる者は少ない。其方の思考が柔軟なのか、

それとも単純なのか』

「カグツチ、そういう言い方は失礼ですよ」

「あはは。いいよ、両方って事で」

確かに、私は単純かもしれない。けど、ツバキの言ってる事は本当だと思うし、思いたい。だったら、信じるしかないよね。

「先ほどの答えですが、ゼヘナは異世界ではありません。正確な距離は判りませんが、同じ世界に存在する、地球とよく似た環境の惑星です」

〈カグツチ〉の言葉を代わりに謝ってくれてから、ツバキが答えてくれた。

惑星ゼヘナ。

そこには地球と同じように空と海と大地があって、人間や動植物が暮らしているらしい。

大きく違うのは『機獣』と呼ばれる金属生命体が生息している事。ゼヘナの人々は機獣を捕獲して、武装と操縦席を設けて、戦闘機獣に改造して戦争の兵器にしていたそうだ。

「ゼヘナで単に『機獣』と呼ぶ場合は、戦闘機獣化されたものを指します。多くは既存の生物の姿を何十倍にも巨大化した姿をしていて、ライオンやオオカミなどの獣、鳥や魚や昆虫、恐竜型も存在します」

ツバキの言葉を聞いて想像してみたけど、まったく実感が湧かない。機械の身体をした巨大な動物。それに武器を付けて操縦する……やっぱりイメージしにくい。ロボットアニメのロボットとは違っだろうし。

「話を続けますね。ゼヘナの歴史は戦争の歴史でした。恒常的に争いが起きていて、それが普通だったそうです」

ツバキの話を聞くと殺伐としたイメージが湧くけど、別に悲惨な世界という訳じゃなかったらしい。それに、もう大昔の事だそうだ。

「どのくらい昔の事なのかは正確な記録がないので判りませんが——ある日、戦乱続ぎだったゼヘナから、戦争がなくなったそうです」

「どうして？ どこかの国が勝ったとか、同盟を結んで仲良くなったとか？」

私の疑問にツバキは首を横に振った。

「それはないと思います。仮にそうだったとしても長続きはせず、新たな戦乱が起きるはずですから」

『実際、それを繰り返していたからこそ、ゼヘナから戦争はなくなかったのだからな』〈カグツチ〉の言葉を聞いて、少しだけ胸が痛くなった。地球だって、世界規模で言えば常にどこかで戦争や紛争が起きてる。住んでる星が違っても、人間の本质は変わらないのかもしれない。

「理由は判っていないんです。ただ、ある日突然、人々の中から闘争本能が失われてしまつた。それ以降、ゼヘナから戦争はなくなりました」

『飽きてしまったのかもしれないな——戦う事に』

ツバキの話を補足するように呟かれた（カグツチ）の言葉は、どこかさびしげなものが感じられた。

「理由はどうあれ、戦争は終わりました。それは事実です。それから人々は、戦争に向けていたエネルギーを日々の生活に役立て始めたそうです」

ゼヘナはずっと戦乱続きで、それが当たり前だった。だから軍事技術ばかりが発達し、しかも機獣きじゅうという存在があつたから、戦闘機械獣に関する技術ばかりが発達していったうだ。それは健全じゃない、歪いびつな進歩だとツバキは言った。

「少しづつ人々の生活は落ち着き、文明も進歩していきました。そこで問題になったのがエネルギー不足でした」

人口が増え、それを維持するための公共施設インフラを稼働させるためのエネルギーが足りなくなつた。そこでゼヘナの人々は機獣を使った発電システムを考案したうだ。

それが——

「ジェネレーター？」

「はい。機獣の心臓部に当たるMBコアは、膨大なエネルギーを無尽蔵に生み出す、ある種の永久機関なんです。それを利用した発電システムが（ジェネレーター）です」

ツバキの説明に、私の中の何かがざわつく。

「MBコアって、ツバキや私の中にあるっていう、あれ……？」

「気になりますよね。でも、すみません。それは後ほど説明します」

不安顔の私を見たツバキは、申し訳なさそうにそう言つて話を続けた。

当然のように、機獣を利用する事に関する倫理的な議論が長年に渡つて展開されたらしい。ゼヘナの歴史は戦争の歴史で、それはそのまま、人と機獣が寄り添ってきた歴史でもあるから。機獣は人間にとつてパートナーのような存在だったから。

「ですが、戦争は終わり、再開する気配は皆無でした。機獣と共に戦場を駆けた経験のある者がいなくなると、世論は機獣のコアを利用する事に肯定的になっていきました」

そして——（ジェネレーター）は実用化された。想定以上の高効率の発電システムである事が実証され、世界中で建造されていったうだ。

「でも、コアって機獣の心臓部なんでしょ？ それを使うって事は……」

人間の臓器移植みたいなのを想像して、少し怖くなった。同じ事であるなら、機獣の心臓を抜き取つて……。

「戦闘機獣になった時点で、機獣の『生身』の部分はコアだけなんです。武装やココピットだけでなく、機体はすべて人工物に置き換えられます。ですから、やみひめさんの考えているような残酷な仕打ちをする訳ではありません。戦闘機獣の機体から切り離され、〈ジェネレーター〉に組み込まれたコアは手足を失った状態ではありますが、生きています」

ツバキの説明を聞いても、あまり気は晴れなかった。ツバキも、自分の言葉に納得はしていないみたいで、

「確かに、気持ちの良い話ではありませんね。機獣も生き物で、人間の都合で改造されて、人間の都合で自由を奪われた……」

と、私の考えてる事を察して複雑そうな顔をした。

『——今更そのような感傷に浸っても詮無き事だ。ここまでは前置きのようなものだぞ』
私が黙り込んでしまったせいで重くなってしまった空気をかき消すように、〈カグツチ〉が割って入ってくれた。正直、ほっとした。

「そうですね、続けましょう。ありがとうございます、〈カグツチ〉」

『私は其方等のように空気を讀んだりはせぬからな』

その〈カグツチ〉の口調は横柄に聞こえるけど、私には照れ隠しに思えた。

「ありがとうございます、〈カグツチ〉。気を遣ってくれたんだよね」

『ふん。別に、そういう訳ではない……』

今で確信した。やっぱり〈カグツチ〉は優しいんだ。

場の空気が緩和されたのをきっかけに、ツバキが話を再開する。

〈ジェネレーター〉が世界中で建造され、稼働し、それは人々の生活になくはならなくなった。高効率で生み出されるエネルギーは技術をより発達させ、文明の発展を促した。そして、それを維持するために新たな〈ジェネレーター〉が建造された。

そんな事を繰り返して長い年月が経った頃に、それは現れた。

「人間の新たな天敵。やみひめさん、貴女が『スライム』と呼んだあれです」

『スライム』——昨日、私達を攻撃してきた灰色で液状の不定形な何か。

「あれは何なの？」

スライムっていうのは粘性のある液状物質全般を指す言葉で、ゲームだとメジャーなザコキヤラだけど、現実にはそんな生物は存在しない。だけど、あれには意思があった。敵意を向けられた。

間違いなく生き物だと感じた。

「本来はあんな液状ではありません。様々な形態がありますが、多くは陸上で生活をする

動物の姿をしています。地球に来る前は、あれもヒョウに似た姿でした」

『推測だが、ツバキのMBコアがこの星の気組成に不適合なように、奴もこの星の環境に適応出来ず、あのような姿になったのかもしれない』

二人の話を聞いて新たな疑問が浮かんだ。

「ツバキはここに来る前から、あの『スライム』と戦ってたの？」

「はい。戦闘中に妙な現象に巻き込まれ、気付けばあの公園にいました」

「それって、ゼヘナから地球にワープしたって事？」

「転移……確かに、そうとしか説明が付きません。地球には転移技術があるんですか？」

「ううん。そんなのSFだよ」

「ゼヘナも同じです」

謎が増えた。ツバキと〈カグツチ〉、それに『スライム』は、どうやって地球に来たんだろっ？

「話を戻しましょう。これは私達が考えても答えはでないでしょうから。まずは現状確認のために、やみひめさんの質問に答えます」

「そうだね、ごめん。続きを聞かせて」

「承りました。人間の新たな天敵——我々は『災厄』という意味を込めて〈カタストロ〉と呼んでいます。これは俗称で、正式名称ではありませんが」

既存の生物に似た姿をしていて、通常のサイズよりも遥かに大きい事から『変異機獣』もしくは『ミュータント・マシン・ビースト』^{M B}というのが正式名称らしいけど、まったく定着しないらしい。特に〈機獣少女〉からは不評で、理由は『一緒にされたくない』というもつともなもの。私も絶対に呼びたくない。

「その〈カタストロ〉は、なんで人間の天敵なの？ 人間を食べる……とか？」

単純な発想だけど、それがシンプルで一番怖いと思う。ただ殺されるだけじゃなくて、大型動物に食べられる。下手をすれば、生きたまま身体を食いちぎられる……ゾツとする。

「それも冗談ではありませんが、そうであった方がましだと思います。〈カタストロ〉の目的は〈ジェネレーター〉に取りつき、内部のMBコアを暴走させる事ですから」

それまではまだ余裕のあったツバキの表情が、深刻なものになる。

「……MBコアが暴走すると、どうなるの？」

「エネルギーの過剰供給が強制的に行われ、電力に変換しきれない大量の余剰エネルギーがマイクロブラックホールを発生させ、〈ジェネレーター〉の周囲一帯を消滅させます」

「……………」

ツバキの言ってる事が判らない。意味は判るけど、頭が理解を拒んでる。

マイクロブラックホール？

それこそSFだ。

「だけど、MBコアが無尽蔵にエネルギーを生み出す永久機関ならありえる……のかな？
私は詳しい事は知らないけど、もしかしたらゼーナのマイクロブラックホールは私の知
っているものとは違うのかもしれない。」

「……〈ジェネレーター〉の周囲一帯って、どのくらいなの？」

「実際に消滅現象が起きたのは一度だけですが、その時は半径約五キロメートル圏内が消滅
したそうです」

「たしか、広島に落とされた原子爆弾の、爆発そのものの被害が半径二キロメートルくら
いだったって教科書に載ってたと思う。その倍以上……。」

「〈カタストロ〉による最初で最後の災厄です。これを教訓に、二度と惨劇を繰り返さない
ため、ありとあらゆる対策が考案されました」

『中には機獣を復活させるという案もあったな』

〈カグツチ〉の言葉に私は首を傾げた。

「すべての機獣が〈ジェネレーター〉になった訳ではないんです。機獣は金属生命体です
から、意思があります。中には〈ジェネレーター〉となる事を拒んだ個体もいます」

ツバキの話によると、機体からコアを抜き出し、休眠施設で眠っている機獣もいるらし
い。

「戦争がなくなり、機獣は不要とされました。だからこそ、〈ジェネレーター〉とする事で
共に生きようと考えました。ですが、これは人間の理屈です。だから、機獣にはそれを拒
否する権利があり、人はそれを認め、折衷案としての休眠処置を提示しました」

『いつかまた、我々が必要とされる時が来るかもしれない。その日を夢見て、永い眠りに
就いた——私もそうだ』

そう語る〈カグツチ〉の声には、何かを懐かしむような響きがあった気がする。

機獣にとっては理不尽な話だと思う。人間の都合で兵器にされて、人間の都合で要らな
いと言われたんだから。

「ですが、機獣の復活案は採用されませんでした。〈カタストロ〉のサイズは個体にもより
ますが、人間と機獣の中間くらいです。そして、〈ジェネレーター〉のある市街地で機獣が
戦闘を行えば相当な被害が出ます」

戦う相手との相性や場所が悪い。消滅現象に比べれば微々たる被害でも、『仕方ない』で
済むレベルじゃないんだと思う。イメージが湧かないけど、機獣は巨大な兵器だから。

「ですが、機獣の力を借りるというのはゼーナの人間であれば本能的に考えつくようです、

「〈ジェネレーター〉のように、機獣のコアをエネルギー供給システムとして利用出来ないかと考案した人が現れました」

その人は〈ジェネレーター〉の基礎理論を提唱した科学者で、彼を中心にした対策チームが結成された。そして、紆余曲折の末に形になったのが〈機獣少女システム〉のプロトタイプで、それは成人男性が装着する事を想定した。ワードスーツみたいなのだったらしい。

「それがどうして、変身魔法少女みたいになったの？」

「ドラマチックな言い方をすれば『奇跡』——ですが、実際は偶然でした。ワードスーツの開発は遅々として進まず、重い空気になりがちだった現場を和ませようと、装着者候補だった男性が連れてきた歳の離れた妹がワードスーツに触れると、『異常』が発生したそうです」

それを聞いて嫌な予感がした。事故とか病気とか、そういう『異常』を想像したから。

「事故の類^{たぐい}ではありませんよ。言ったでしょう、『奇跡』だと」

私の不安顔に気付き、安心させるようにツバキは微笑んだ。

「『異常』なのは光景です。彼女が触れたワードスーツが粒子状に分解されて、その身を包むように再構築されたそうです。その光景を目撃した開発スタッフの一人が、こんな証言をしたそうです。『まるでアニメの変身ヒロインみたいだった』——と」

私はその話を聞いて少しだけ脱力した。どんな場所にもいるんだ、そういう人。

「事実上の〈機獣少女〉一号となった彼女を仲介する事で、システムの理論と、それを効率的に運用するためのMBデバイスが必要だと判り、そこからはトントン拍子で開発が進んだそうです」

そして、考案時のワードスーツの面影はまったくなく〈機獣少女システム〉が完成したのが半世紀前。それから現在に至るまで、〈カタストロ〉による消滅現象は起こっていない。すべて〈機獣少女〉達が未然に防いでいる結果だそうだ。

「ねえ、〈機獣少女〉って事は、みんな女の子なの？」

ふと疑問に思ったので訊いてみた。〈ジェネレーター〉が世界中で建造されているなら、それ以上の人数の〈機獣少女〉がいないと護れないはずだけど、全員が女の子なのか気になったから。

「はい、そうですよ。〈機獣少女〉ですから」

『少女』の部分を強調してツバキは肯定した。世界中にツバキみたいに戦ってる女の子がいる世界……ファンタジーだ。

「ただ、〈機獣少女〉というのも俗称なんです。正式には『MBドライバー』と呼称すべき

「なんですが、『変異機獣』を（カタストロ）と呼ぶのと同じで、まったく浸透していません」

『機獣少女』になれるのは歳若い娘だけだからな。例外はない。それに外連味があつてよいではないか』

（カグツチ）の言う事は判る。私も『MBドライバー』より親しみやすいと思う。

「でも、どうして女の子だけなの？」

この手のアニメや漫画ではお約束だけど、これは現実だから何か理由があるはず。

「先ほど、やみひめさんに訊かれたMBコアですが、これは本来、マシン・ビーストの名前が示す通り——機獣のコアを指します。そして、初の（機獣少女）となった少女の検査を行った結果、人間にもMBコアに酷似した仮想器官の存在が確認されたんです」

『かそっきかん？』

聞き慣れない言葉だったので、脳内で漢字変換が出来なかった。

「仮想の器官です」

そう言つてツバキは机の上にあつたメモ帳に字を書いて教えてくれた。実際に臓器として存在する訳ではなく、魂や命や感情といった目で確認出来ない概念的なものだとも。

「正式には、極めて近いものという意味で『N・MBコア』と呼称します。ですが、専門家が混乱を避ける際に使うだけで、単にMBコアと呼ばれるのが普通です」

「それって男の人にはないの？」

「存在はします。ですが、ほとんど機能していません。機獣のコアから採取された因子を組み込まれたMBデバイスに選ばれ、（機獣少女）としての力を使うためには、N・MBコアによる機力の体内循環が必須条件です。ですから、（機獣少女）はすべて女性なんです」

『きりよく』って何？』

また聞き慣れない単語が出てきた。『気力』とは違つたろうけど。

『機獣の力』と書いて機力です。（機獣少女）は大気中の金属イオンをN・MBコアで吸収し、機力に変換出来ます。逆に言えば、これがなければMBジャケットも装着出来ませんし、待機状態のMBデバイスを展開する事も出来ません」

『ついでに言うと、N・MBコアがもつとも活性化するのが少女と呼ばれる年代の少女なのだ。最年少は九歳、最年長は十九歳と記録にはある』

だから、必然的に（機獣少女）は少女なんだ……。

「二十歳になると、そのN・MBコアが機能しなくなるの？」

「そういう事です。統計的には十五歳頃から活性値が下がり、十九歳まで続けられずに『卒業』していく方も多いそうです」

『卒業』はさすがに訊かなくても判る。〈機獣少女〉を続けられなくなるという意味だ。けど、年齢と共に数値が下がるってというのは……なんとなく複雑。

『『N・M・Bコア』の機能計測は、我々MBデバイスが行う。其方は合格した訳だな。しかも、かなりの活性値だ。良き〈機獣少女〉となる素質があるぞ』

「あはは。ありがとう」

〈カグツチ〉のお墨付きに喜んでいいものか、ちょっと判断に困ったけど、そう答えておいた。

「だけど、ツバキと〈カグツチ〉の話聞いて決心がついた。

「——ねえ、ツバキ」

〈機獣少女〉は気軽にやっつけていい仕事じゃない。でも、誰かがやらなくちゃいけない。地球には〈ジェネレーター〉はないけど、〈カタストロ〉が別の何かに目を付けるかもしれない。そうなった時、消滅現象や、もっとひどい事が起きるかもしれない。そんなのは、絶対に駄目。

だから——

「やっぱり私、ツバキを手伝いたい。こんな話聞いたら、尚更だよ」

「——」

ツバキは無言で私の言葉を聞いている。私を見つめる青い瞳は透明で、心にやましい事があつたら直視出来なかったと思う。

「だけど、私は目をそらさない。本気だから。

「お願い、手伝わせて」

ツバキは無言。だけど、顔をくしゃくしゃにして——泣いていた。

声を出さずに、蒼玉のような瞳から大粒の涙を零していた。

初めて見た。ツバキの歳相応の——ただの小学五年生の女の子の顔。

ずっと無理をしていたんだと思う。弱い姿を見せられなかったんだと思う。

だって——ツバキは名うての〈機獣少女〉だから。

戦うヒロインは泣いちゃいけないから。

でもね。

「声を出して泣いていいんだよ？ ツバキはもう一人じゃないんだから」

だって——

「これからは、私も一緒だから」

そう言っつて、私はツバキを正面から抱きしめた。戦士のものとは思えない華奢な身体が、びくりと震えた。けど、すぐに強張っていた緊張は解けて、恐る恐る、私の背中に腕を回

してくれた。

それから、私の胸に顔を埋めて泣きじゃくるツバキが泣きやむまで、そうしていた。ちよつとはお姉さんらしい事が出来たかな？

密着してる身体の一部は、明らかにツバキの方がお姉さんだけど……。でも気にしない。

胸の大きさと女の価値は決まらないっていうし。

私はまだまだ、これからだし。

アサトが大きい方が好きとは限らないし。

……。最後のは自信ないけど。

ともかく——ツバキのためにも、やらなきゃ。

こうして私は、改めて〈機獣少女〉を続ける決意を固めた。

『——時にやみひめよ。其方は成長すれば、乳房は立派なサイズになっていると思うぞ』

「え——〈カグツチ〉、そういうの判るの!？」

『うむ。私の何の根拠もない勘が、そう告げておる』

「根拠、ないんだ……」

せっかく綺麗にまとまったと思ったのに……。台無しだ。

つづく

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第二話をお届け致します。

序盤にサービスシーン（お風呂！）を入れたのは、中盤以降ずっと部屋で説明会だからです。苦し紛れです。

とはいえ、ようやくゼヘナや機獣少女の説明が出来て、個人的には楽しかったというか、すっきりしました。ただ、一応説明しているだけなので、次話を読む頃には忘れていても問題ありません。設定なんて、『一応あれば』いいんです。そんなものです。必要な情報はまた書けばいいですし、その手間を惜しまないかどうかが小説を書く上で大切な事かもしれません。偉そうですね。すみません。

他にあとがきで書いておくべき事……あ、アバンのラストの「私ね——ツバキと友達になりたいんだ」は劇場版『なのは』のオマージュです。思いついたので、だって大好きなんですから。

良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

今回は翌日の日曜日のお話です。ツバキの服や下着を買いに行くショッピング回の予定です。あのキャラも登場してトライアングラーです。君は誰とキスをする？

それでは、今後も『ゾイやみ』をよろしく願います。

——まったく、小学生は最高だぜ！

2014 / 11 / 10 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る